

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第12回 第4.3.7節～第4.4.2節

2018年6月15日

小田 勝

106頁「4.3.7 え…ず」では、いくつかの類例をあげておく。同頁用例(5)～(9)の類例、

- ・馴れ馴れしくやとかしこまりて、え思ひ給ふるままにも聞こえさせぬを(源・東屋)

107頁用例(16)(17)の類例、

- ・「かかる人の制し給へば、雲居にてだにもえ [対面せず]」など言ひ聞かせよ。(平中27)

用例(22)(23)の類例、

- ・いみじう苦しげに思しめされたれど、御涙もえ出でず。(讃岐典侍日記)

108-109頁用例(35)～(40)の類例、

- ・これや逃れぬ契りならむと、我ながら先の世ゆかしき心地して(とはずがたり)

109頁用例(41)(42)の類例。

- ・空のけしき、はかばかしくも見えず、えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。(更級)

次のような「え」は「きっと…」のような意だろうか。

- ・この靈は様々にこともありけれども、さまでの大事はえ無きにや。(愚管抄)

「4.3.9 かつ」の111頁、「平安時代になると、…第1音節が濁音化した」としたが、上代からすでに濁音の例がある(万 859, 3470)。連用形の連用修飾用法は珍しいだろう。

- ・あはれとや過ぎがて(=通り過ギニクソウニ) 見えてほととぎすひとりながめの里に鳴くらん(為忠家後度百首)

「がてにす」は「…できないでいる」の意である。

- ・憂き世には門閉せりとも見えなくになどか我が身の出でがてにする(=出家デキナイデイルノカ)(古今 964)

111頁「4.3.10 かぬ」。まず、類例を追加する。

- ・[馬ハ] 穆王八疋の天馬もかくやと覚ゆるばかり [ノ逸物] にて、[信頼ハ] 乗りかぬ

給ふところを（平治・古活字本）

なお、次のような「恋ひかぬ」は、「恋することができない」の意ではなく、「恋いしさを抑えきれない」すなわち「恋しくてならない」の意であるから要注意。

- ・高砂に妻恋ひかぬて鳴く鹿は逢坂山に行きて住めかし（歌合 69 祐子合）
- ・いにしへの雲居の花に恋ひかぬて [出家ノ我ガ] 身を忘れても見つる春かな（新勅撰 1045）

111 頁「4.3.11 その他の不可能を表す表現」に、下例を追加する。

- ・あるは身一つからうじて逃るるも、資財を取り出づるに及ばず。（方丈）
- ・馬にかき乗せ奉らんとしけれども、乗りたまらせ給ふべしとも見えざりければ（保元・金刀比羅本）

用例(3)について、「心細さににつつみもあへられぬ心地して」（散木奇歌集・詞書）では、「あふ」に更に可能の助動詞「らる」を付けている。

「4.4.1 使役態」の 113 頁、3 つ目の◆の①は、うっかりすると、四段動詞の未然形に助動詞「す」が付いたように見える、サ行四段動詞の例。他には「通はす・霧らす・漂はす・靡かす・鳴らす・慣らはす・匂はす・妬ます・働かす・響かす・灰めかす・纏はす・惑はす・転ばす・煩はす」などがある。

114 頁「4.4.2 使役の打消形」は、本連載第 11 回に述べたように、節名を「否定事態の使役」に変更する。次例は使役の禁止形である。

- ・世に経れば人のつらきも思ふらん我にいたく嘆かせそ君（道信集）

新刊の『読解のための古典文法教室』を授業で使っている。同書 23 頁例題 [28] は、移動動詞は敬語形になると視点の制約から解放される（例えば「おはす」や「渡り給ふ」は、「行く」「来」双方の敬語として用いられる）という話。『総覧』では 622 頁に説明があるのだが、『教室』では、「現代語の「いらっしゃる」も同様である」という、『総覧』にない一言を添えた。ただ、驚くべきことに、今の若い世代は、「いらっしゃる」を「行く」の敬語として使わなくなっている（水谷美保 2005）。ふだん教室で、「行く」の意の「おはす」を「いらっしゃる」と現代語訳している古文の教師は、そんな状況も知っておくとよいだろう。なお、『教室』の 29 頁最終行の「すなわち④は」は、「すなわち②は」の誤植であった。

[引用文献追加] 水谷美保 2005 「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』1-4